文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和7年度
地域文化財総合活用推進事業
（世界文化遺産）

縄文 JOMON JAPAN

縄文時代の謎を探る

環状列石と祈りのかたち



2025

青森市小牧野遺跡保存・活用推進事業実行委員会

1 世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」と環状列石

2021年7月27日、「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコの世界文化遺産に登録されました。

1万年以上続いた縄文時代は、狩猟・漁労・採集を基盤としながら、自然と調和した暮らしを営み、豊かな精神文化と高度な技術を築き上げました。世界文化遺産としての登録は、こうした縄文文化の特質が世界に認められた証です。

縄文遺跡群は、定住の始まりから祭祀・儀礼の発展に至るまでの「６つのステージ」として整理され（図1）、その連続性が人類史において特別な価値をもつ文化の歩みを示しています。

登録された17の遺跡は、北海道・青森県・岩手県・秋田県に広がり、集落跡・墓域・祭祀の場など、多様な遺構が良好に保存されています。その中には、小牧野遺跡（青森県青森市）をはじめ、大森勝山遺跡（青森県弘前市）、大湯環状列石（秋田県鹿角市）、伊勢堂岱遺跡（秋田県北秋田市）という4つの環状列石が含まれています（図2）。また、関連資産として、北海道南部の鷲ノ木遺跡（北海道森町）でも環状列石が確認されています。

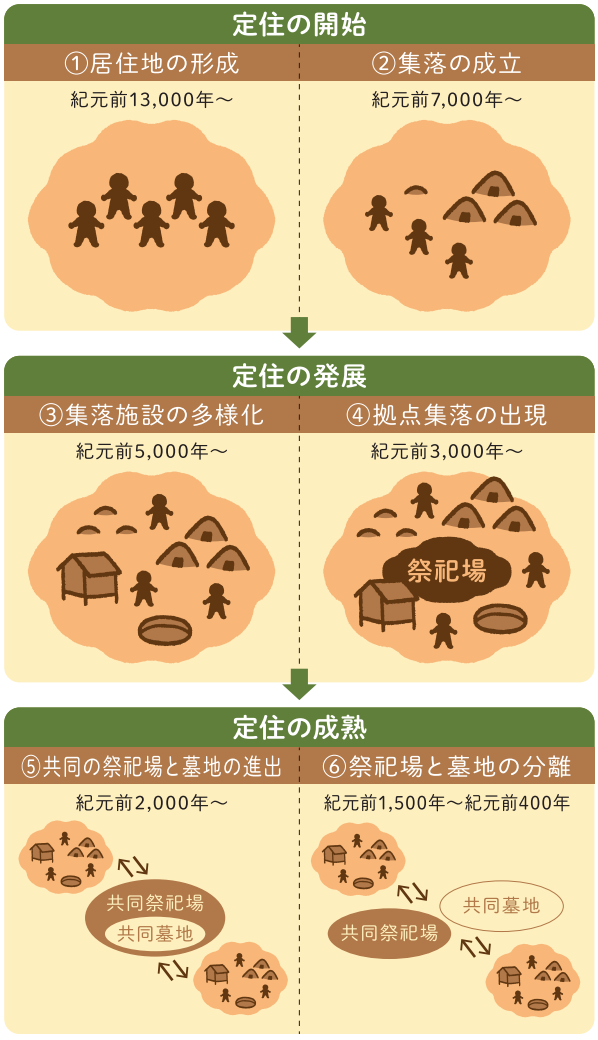


図1 集落展開および精神文化に関する6つのステージ



図2 世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の位置

※青文字は環状列石を主体とする遺跡

環状列石がどのように使われていたのかは、まだはっきりとは分かっていません。祖先を祀るための儀式の場だったのか、季節ごとの祭りを行う場所だったのか、あるいは太陽の動きを意識して並べられたのかなど、さまざまな説があります。こうした未解明の謎もまた、環状列石が人々を惹きつけ続ける大きな魅力となっています。

2 環状列石とは

大小さまざまな石が円や楕円を描くように並べられた「環状列石」は、縄文時代を象徴するモニュメントです。かつては規模の大小を問わず「環状石籬（せきり）」や「ストーンサークル」と呼ばれてきましたが、現在では形態や用途に応じて呼び分ける傾向があり、土坑墓の上に石を配したものが「配石墓」、直径の小さいものが「環状配石」、そして直径10mを超えるような大型のものが「環状列石」と呼ばれています。

大型の環状列石が盛んに造られたのは、1万年以上続いた縄文時代の後半、今からおよそ4,500〜3,000年前（縄文中期後半〜後期）にかけてです。直径は10m前後の比較的小さなものから、50mを超える大きなものまでさまざまあります。

これらの分布は、大きく二つの地域に分けられます（図3）。ひとつは北関東から中部地方にかけての地域で、ここでは縄文中期後半に多くの環状列石が築かれました。もうひとつは北海道から北東北にかけての地域で、こちらは縄文後期に集中して造られ、その前半期には北海道南部から北東北、後半期には北海道の小樽・余市周辺に多く見られます。



図3 主な環状列石の分布

3 十腰内（とこしない）文化と環状列石

「十腰内文化」という名称は、青森県弘前市の十腰内(2)遺跡を標識とする「十腰内式土器」に由来します。この文化をどの範囲で捉えるかについては、考古学の中でも二つの見方があります。ひとつは縄文後期初頭から末葉までの全期間を含める見方、もうひとつは後期初頭から前葉にかけての短い時期に限定する見方です。

後期全体を俯瞰すると、中葉以降では地域的な特色は徐々に薄れ、北東北では関東地方や北海道道央部など、より遠方の要素を取り入れた土器が作られるようになり、広域的な分布圏が形成されていきます。このため、本冊子では、地域的な特徴が顕著な後期前半（後期初頭～前葉）を「十腰内文化」として位置付けることにします。

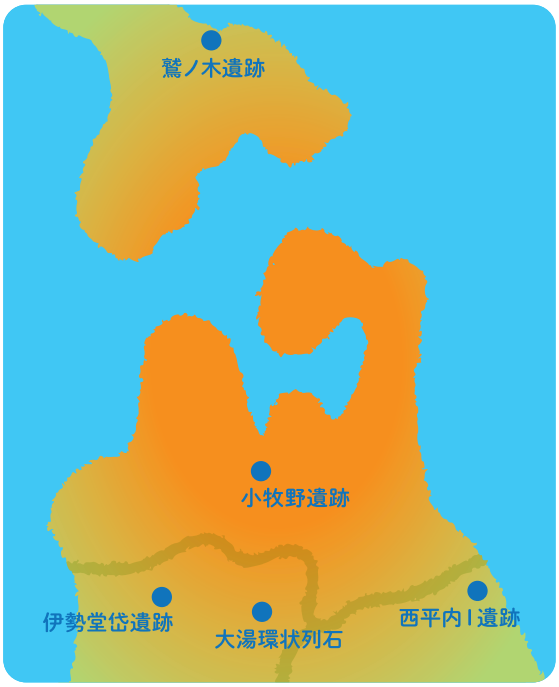


図4 十腰内文化圏の主な環状列石

この時期、北東北から北海道南部にかけては、環状列石や土器棺墓（図12）、切断壺形土器（図17）、鐸形（たくがた）土製品（裏表紙）、三角形岩版（がんばん）（写真23）など、顕著な地域性をもつ遺構・遺物が共通して見られます。特に環状列石は十腰内文化を象徴するモニュメントであり、現在、世界文化遺産または関連資産に位置付けられているものとして、北から鷲ノ木遺跡（北海道森町）、小牧野遺跡（青森県青森市）、伊勢堂岱遺跡（秋田県北秋田市）、大湯環状列石（秋田県鹿角市）の4か所があります（図4）。

このほか、十腰内文化の環状列石としては、後述する青森県内の事例のほか、岩手県洋野町の西平内（にしひらない）Ⅰ遺跡などが知られ、広域的な文化交流や共通の精神的基盤を示す重要な手がかりとなっています。


写真1 鷲ノ木遺跡


写真2 伊勢堂岱遺跡　写真提供：北秋田市


写真3 大湯環状列石　写真提供：大湯ストーンサークル館


写真4 西平内Ⅰ遺跡　写真提供：洋野町教育委員会

コラム1 縄文後期の土器の移り変わり

青森県の縄文後期の土器は、時期の進行に伴って形や文様が大きく変化していきます。その変化は、考古学的にいくつかの段階に区分され、縄文人の暮らしや地域文化のつながりを理解する手がかりとなっています。

後期初頭：中期末葉の流れを受け継ぎつつ、新しい文様や形の土器が登場（1～3）。後期初頭の新段階では、三角形や方形の区画文が用いられ、2～3型式に細分されています（4～6）。

後期前葉：十腰内（2）遺跡出土の十腰内Ⅰ群に併行する土器で、一般的に十腰内Ⅰ式土器と呼ばれています。3つの段階に分かれ、古いⅠa式（7・8）から新しいⅠb式（9・10）へ、さらに四ツ石式（11・12）へと変化します。

後期中葉：十腰内Ⅱ～Ⅳ群に併行する土器（13～21）で、関東から北海道まで、広い範囲で共通性の高い土器が作られる時期。磨消縄文や羽状縄文を用いた多彩な文様が特徴的です。

後期後葉：十腰内Ⅴ群前後の土器で、4つの段階が考えられています（22～31）。貼瘤と呼ばれる突起が盛んに付けられる時期。最終段階になると刺突文へと移行します。

後期末葉：十腰内Ⅵ群前後の土器（32～34）で、貼瘤はほぼみられなくなり、縦位の刻目をもつものが増えてきます。

このような土器の変遷は、文様や施文手法の移り変わりを映し出すだけでなく、当時の広域交流や地域文化のつながりを読み解くうえで欠かせない手がかりとなっています。



図5 縄文後期の土器　児玉2023より転載

4 青森県の環状列石と大型配石遺構

十腰内文化期に築かれた青森県内の環状列石は、その規模の大きさと構造の多様さにおいて、全国的にも極めて特徴的です。これらは単なる石の並びではなく、集団の儀礼・埋葬といった諸活動が一体化した、複合的かつ象徴的な空間を形成していました。以下に代表的な事例を示します（図6）。

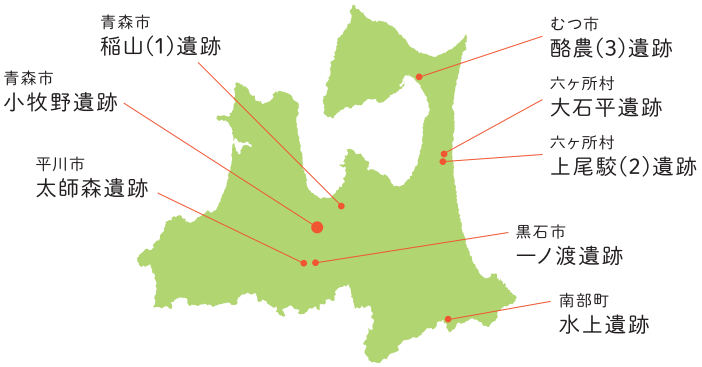


図6 青森県内の十腰内文化期の環状列石等

小牧野遺跡（青森市）

斜面を切土・盛土して平坦面を造成し、その上に直径約55mの大規模な環状列石を構築しています。列石内部からは4基の再葬土器棺墓が検出され、外側には土坑墓群、竪穴建物跡、貯蔵穴、捨て場跡、水場遺構などが伴います。これらのことから、長期間にわたり大規模な祭祀や埋葬が繰り返されていたと考えられています。



写真5 小牧野遺跡



写真6 縦横交互に並べられた石（小牧野式配列）

稲山(1)遺跡（青森市）

3基の配石墓を中心に、多量の石を円形に並べた直径約32mの環状列石が発見されました。外周には数多くのフラスコ状土坑が環状に配置され、生活の場と儀礼の場が密接に結びついていたことが明らかになっています。

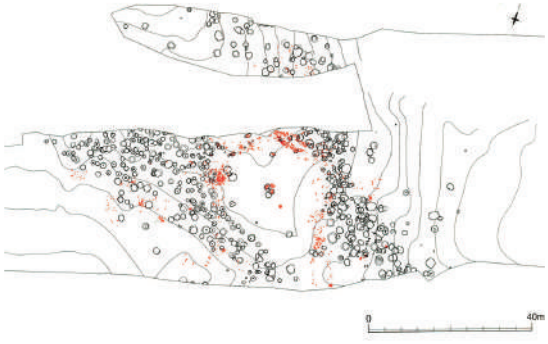


図7 稲山(1)遺跡　青森市教育委員会2004より転載

太師森（たいしもり）遺跡（平川市）

直径約40～50mの楕円形またはC字形の環状列石で、50基以上の組石や弧状列石から構成されています。中央部からは再葬土器棺墓2基、外側からは石棺墓や土坑墓が検出され、墓域としての性格が特に強く表れています。



写真7 太師森遺跡　写真提供：平川市教育委員会

大石平遺跡（六ヶ所村）

直径約25ｍの中央広場の中心に直径5ｍの配石を配置し、その外側に長さ15ｍの弧状列石を設置。さらにその周囲を土坑群や柱穴群が環状に巡り、外縁部には複数の竪穴建物跡も分布しています。祭祀空間と生活空間が連続する構造がうかがえます。

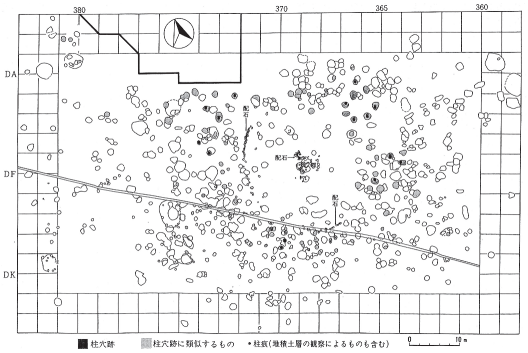


図8 大石平遺跡　青森県教育委員会1987より転載

上尾駮(2)遺跡（六ヶ所村）

直径約20ｍの中央広場を囲むように配石墓が並び、その外側に土坑群が環状に配置されています。西側斜面には竪穴建物跡が広がり、生活空間と祭祀空間の有機的な結びつきを示しています。

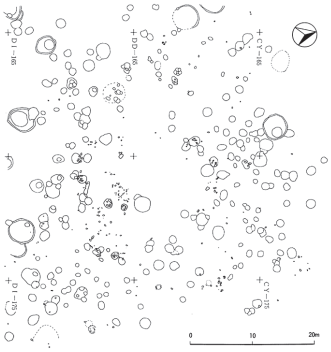


図9 上尾駮(2)遺跡　青森県教育委員会1988より転載

酪農(3)遺跡（むつ市）

直径約20ｍの環状列石が確認され、その内部から4基の再葬土器棺が出土しました。さらに、列石から約10ｍ離れた地点で人骨を伴う再葬土器棺墓も検出されており、環状列石と再葬儀礼との深い関連がうかがえます。



写真8 酪農(3)遺跡　写真提供：青森県埋蔵文化財調査センター



写真9 水上遺跡



写真10 一ノ渡遺跡　写真提供：青森県埋蔵文化財調査センター

また、環状ではないものの、大型の配石遺構も県内各地で発見されています。例えば、水上遺跡（南部町）では、弧状列石・直線状列石・特殊組石を含む直径約17ｍの大型配石遺構が検出されました（写真9）。一ノ渡遺跡では組石や立石が複数確認され、中でも長方形を呈するV32組石は長さ約15ｍに達する大型配石遺構として注目されます（写真10）。

これらの環状列石や大型配石遺構は、後述する十腰内文化の特異な埋葬や地域的特色をもつ遺物の出土と深く結びついており、当時の社会構造や精神文化を理解するうえで欠かせない資料となっています。

5 十腰内文化の特異な埋葬① 土器棺墓

(1)再葬土器棺墓の調査・研究の歩み

縄文時代の埋葬の中でも、特に特徴的なものが「再葬土器棺墓」で、青森県を中心に分布しています(図10)。これはいったん土坑墓などに埋葬した遺体、あるいは風葬などで自然に肉が朽ちた後に骨を取り出し、のちに土器に納めて埋葬する方法で、青森県での調査は大正時代にさかのぼります。

1915(大正4)年、青森市浪岡の天狗岱遺跡で、人骨を納めた土器が発見され(図11)、1917(大正6)年に東京大学の笠井新也氏が発掘を行い、洗骨式であることを報告しました。

その後、1933(昭和8)年には青森市久栗坂の山野峠遺跡で道路工事中に複数の土器棺が見つかり、東北大学の喜田貞吉氏らが調査(写真12)。翌年の発表をきっかけに、縄文時代の再葬に注目が集まりました。

1968(昭和43)年、慶應義塾大学の江坂輝弥氏が再葬土器棺墓の論考を発表。同年、平川市の堀合(1)遺跡では江坂氏自身が土器棺を調査し、この調査に参加していた葛西勵氏がその後の研究を引き継ぎました。葛西氏は石棺墓と土器棺墓の併存例から、石棺墓を一次葬、土器棺墓を二次葬とする説を提示し、2002(平成14)年には長年の成果をまとめた著書『再葬土器棺墓の研究』を刊行し、この分野の基礎的研究として大きな役割を果たしました。



図10 再葬土器棺墓の分布

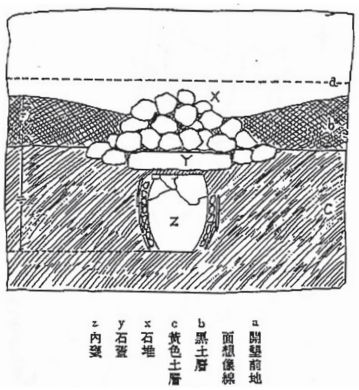


図11 天狗岱遺跡第1号墳墓　笠井1918より転載

(2)特異な出土事例

再葬土器棺墓は、津軽・南部・下北の各地域で見られ、特に津軽地域の青森市・平川市・黒石市、南部地域の五戸町での出土が多く見られます。土器棺の多くは掘った穴に土器を正立させて埋めていますが、中には極めて特徴的な事例があります。

山野峠遺跡(青森県青森市)

この遺跡では、まず扁平な石で囲い、蓋石を載せた6基の石室が構築され、その内部から計12点の土器棺が出土しました。特筆すべきは、そのうちの1点に小児1体と成人2体、計3体分の人骨が納められていたことです。しかも一部の骨には赤色顔料の付着が認められます。当時発見された12点の土器棺のうち5点が赤彩されており、赤彩率は約42%に達します。また、現存する6点の土器棺(図12)のうち4点が赤彩されており、この遺跡で赤彩が特別な意味を持っていたことを示唆します。



写真11 昭和8年12月頃に撮影された山野峠遺跡の土器棺を復元している様子　児玉2025より転載
※白黒写真をカラー化したもの



写真12 山野峠遺跡 石室内の土器棺　個人蔵

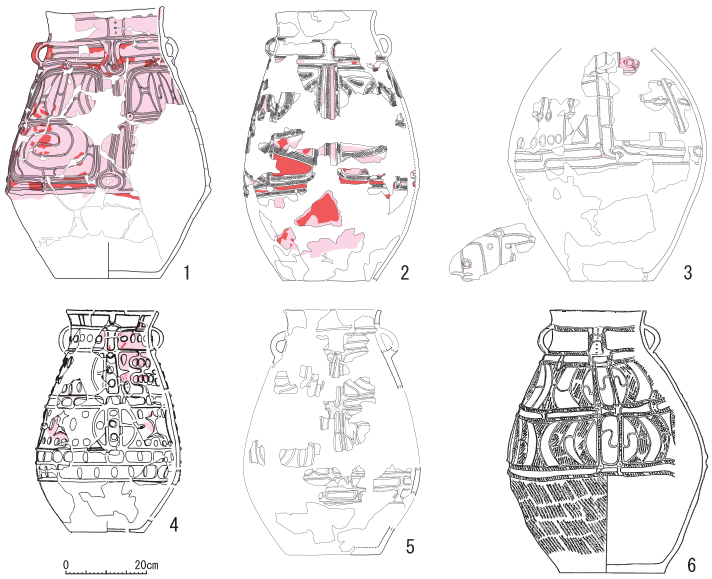


図12 山野峠遺跡の現存する土器棺　児玉2025より転載

薬師前遺跡（青森県五戸町）

この遺跡では、1つの土坑から3つの土器棺がまとまった状態で発見されました。そのうち1点の土器棺からは、腕や脚の骨が立てられた状態で出土し、腕の骨にはベンケイガイ製の腕輪が7個通されていました（写真13）。また、いくつかの土器棺は異なる個体の土器を上下に組み合わせており、単純な容器としての利用にとどまらず、意図的で複雑な構成がなされていました。こうした特徴は、薬師前遺跡における葬送儀礼が極めて手の込んだものであり、埋葬された人物の特別な地位や役割を反映していた可能性も考えられます。



第3号土器棺上位　　第3号土器棺下位

写真13 薬師前遺跡の土器棺内部　写真提供：五戸町教育委員会

小牧野遺跡（青森県青森市）

小牧野遺跡の環状列石内部からは、4つの土器棺墓が発見されています。なかでも第1号土器棺墓は、極めて特異な構造を示しています。右のイラストのように3つの土器を組み合わせたもので、大型壺形土器の口縁部から胴部下半にかけてV字状に壊し（写真14右）、その内部に中型の壺形土器上半部を納め（写真14左）、さらにその口縁部に逆さにした浅鉢形土器を被せていました。一方で、環状列石の外側からは一般的な土坑墓（土葬墓）が数多く見つかっているのに対し、環状列石内部から土器棺墓が4つしか見つかっていない点から、列石の構築を主導した人物や、共同体の指導者層の再葬であった可能性も考えられます。



第1号土器棺墓の組み合せ方



写真14　小牧野遺跡の土器棺

6 十腰内文化の特異な埋葬② 石棺墓

(1)一次葬墓としての石棺墓

石棺墓とは、墓穴の内部に石を組み、遺体を納める構造の墓です。東北北部では青森県と秋田県に分布が見られますが、特に青森県では津軽地域に集中しています。構築時期は縄文中期末葉から後期前葉が中心で、すべての例ではありませんが、遺体を納めた後に土を入れず、内部を空洞のままにしておくものもあります。

このように内部を空洞にしておくと、ハエの働きなどによって肉や内臓が取り除かれ、骨化が早まります。葬送の流れではこれが一次葬にあたり、その後の二次葬(前述の再葬土器棺墓など)への移行を容易にし、葬送手順を効率化する役割を果たしていたと考えられます(図16)。



図13 東北地方北部の石棺墓の分布

(2)検出事例

山野峠遺跡(青森県青森市)

土器棺を収めた石室が列状に並ぶ反対側の場所で、7基の石棺墓が列をなして見つかりました。保存状態の良い第2号石棺墓(写真15)は、長さ160cmを測り、成人が体を伸ばしたまま安置できる大きさです。板状の石を立て、底石も敷かれています。種類の異なる2列の墓が同時期のものであることから、亡くなった人はまず石棺に葬られ、その後、骨が取り出され、土器棺に納められて再び埋葬されたと考えられています。



写真15 山野峠遺跡の石棺墓

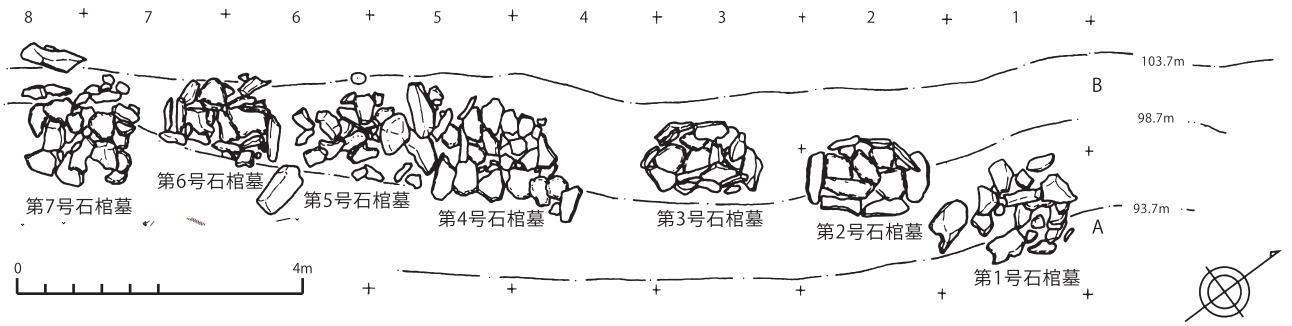


図14 山野峠遺跡の石棺墓群

青森市教育委員会1983より転載

堀合(1)遺跡(青森県平川市)

複数の再葬土器棺墓が見つかった区域の近くで、12基の石棺墓が検出されました。このうち長さ160～200cmのものが8基あり、成人の遺体をそのまま十分に納められる規模です。基本的に蓋石が被せられていますが、山野峠遺跡のような底石はありません。第6号・第11号石棺墓からは、長管骨が積み重なった状態で出土しており、主要な骨は土器棺に収納し、残った骨を整理した可能性が示唆されます。



写真16 堀合(1)遺跡の石棺墓群
写真提供:平川市教育委員会

堀合(3)遺跡(青森県平川市)

第1号棺では、男性3体・女性1体・性別不明2体分の計54点の人骨の破片が出土しました。石棺墓の規模から見ても同時に6遺体を納めることは難しいため、遺体を安置して骨化した後に骨を取り出し、この工程を繰り返して石棺墓を再利用した可能性があります。

その他の事例

稲山(1)遺跡(青森県青森市)では、長さ35～70cmという非常に小型の石棺墓が見つかり、子どもの再葬との関連が指摘されています。また、すべての石棺墓が一次葬墓であったわけではなく、水上(2)遺跡(青森県西目屋村)のように単葬施設(土葬用)だった例もあります。

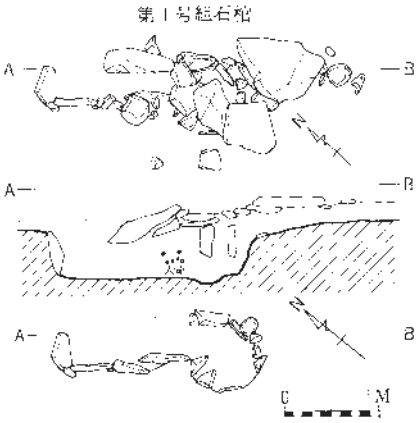


図15 堀合(3)遺跡の石棺墓
平賀町教育委員会1974より転載

このように、石棺墓は単なる埋葬施設としてだけでなく、後に土器棺へと骨を移すための準備の場としての性格を持っていました。遺体を自然に還し、改めて葬るという手順は、祖先とのつながりを重んじた縄文人の死生観をよく表しているといえるでしょう。



①地面に穴を掘り、壁や底に平らな石を配置します。完成した石棺墓に遺体をねかせ、石で蓋をします。



②遺体にはハエが群がり、産み付けられた卵はウジへと変わり、遺体の解体を急速に進めたものと思われます。



③数年後、石棺墓の蓋が開けられ、白骨化した遺骨を取り出します。骨は、きれいに洗い浄めていたことも考えられます。



④取り出した骨は、ていねいに土器棺の中に入れていきます。その後、石室に土器棺を収納し、最後に蓋をします。

図16 山野峠遺跡での遺体の解体と再葬イメージ

7 十腰内文化の特徴的な遺物① 彩色土器

十腰内文化には、独自の造形や装飾をもつ土器が数多く見られます。その中でもひときわ目を引くのが「彩色土器」です。彩色土器とは、土器の表面に顔料や粘土系の材料を塗布し、色彩による装飾を施した器で、大きく分けると「焼成後彩色土器」と「焼成前彩色土器」の二種類に区分されます。



写真17 焼成後彩色土器（大湯環状列石）
大湯ストーンサークル館蔵、児玉2025より転載



写真18 焼成前彩色土器（稲山(1)遺跡）
青森市教育委員会蔵、児玉2025より転載

焼成後彩色土器

土器を焼き上げた後に赤色顔料を混ぜた赤色漆を塗ったものが多く、全体を塗る場合もあれば、一部にのみ彩色する場合もあります。器形としては壺形や浅鉢形が多く、とりわけ「切断壺」への彩色が目立ちます（図17）。切断壺は、焼成前に一つの土器を上下二つに切り離したもので、土坑墓から出土する例も多く、葬送儀礼との結びつきがうかがえます。焼成後彩色土器の多くは、祭祀や儀礼に加えて日常生活でも使用された痕跡が認められます。

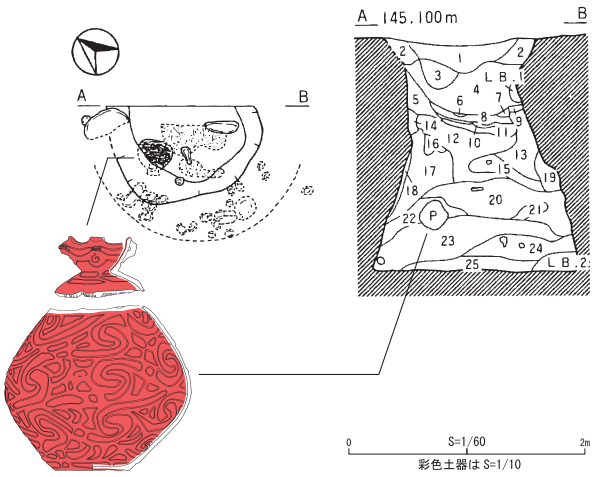


図17 土坑墓から出土した切断壺（小牧野遺跡第128号土坑）
児玉2025より転載

コラム2 北海道・北東北における彩色土器の分布と変遷（図19）

焼成後彩色土器は、縄文中期前葉～中葉では北海道南部から青森県にかけてほとんど見られず、岩手県や秋田県の一部に限られていました。中期後葉になると青森県でも分布が目立つようになり（①）、中期末葉以降には北海道南部にも広がります（②）。こうした動きから、岩手県・秋田県から青森県、そして北海道南部へと、焼成後彩色土器が次第に伝わっていったと考えられます。

一方、焼成前彩色土器は、後期前葉に集中し、その分布範囲は同時期の焼成後彩色土器（④）よりも狭くなっています（⑤）。

このような彩色土器の広がりや変化には、顔料などの彩色材料の入手、技術の伝播、地域間の交流、そして集落の規模など、さまざまな要因が影響していたと考えられます。

①中期後葉（焼成後）



焼成前彩色土器

まだ焼き上げていない段階で赤色（写真19）や白色（写真20）の粘土系材料を塗り分けたり、文様を描いたりしたものです。多くの場合、輪ゴムを楕円状・C字状・S字状などに変形させたような文様の外側に彩色が施され、見る者に強い視覚的印象を与えます。また、焼成前彩色土器では、彩色工程に特徴があります。粘土系の彩色材料と沈線（線刻）の重なりを詳しく観察すると（図18）、①沈線が彩色層を押し込むもの（粘土系材料→沈線）、②沈線が彩色層を削り取るもの（粘土系材料→沈線）が多く、逆に③彩色層が沈線を覆い隠すもの（沈線→粘土系材料）は少数です。このことから、多くの場合、まず彩色が施され、その後に沈線による文様が加えられたことがわかります。

器形は、壺形や浅鉢形に加え、深鉢形にも多く見られ、焼成後彩色土器とは異なる傾向を示します。用途も幅広く、祭祀や儀礼に使われたものに加え、煮炊き用の深鉢など日常的に使用された例も少なくありません。



写真19 赤色粘土系材料を使用した土器（内田(1)遺跡）
青森県埋蔵文化財調査センター蔵、児玉2025より転載



写真20 白色粘土系材料を使用した土器（稲山(1)遺跡）
青森市教育委員会蔵、児玉2025より転載



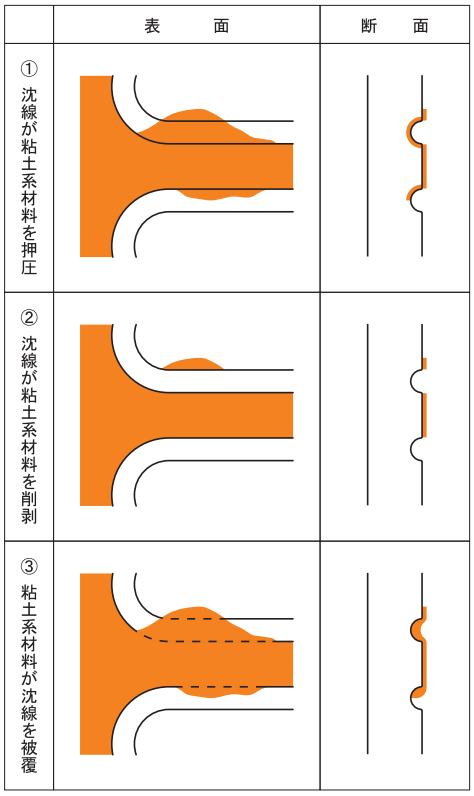


図18 粘土系材料と沈線との関係　児玉2025より転載

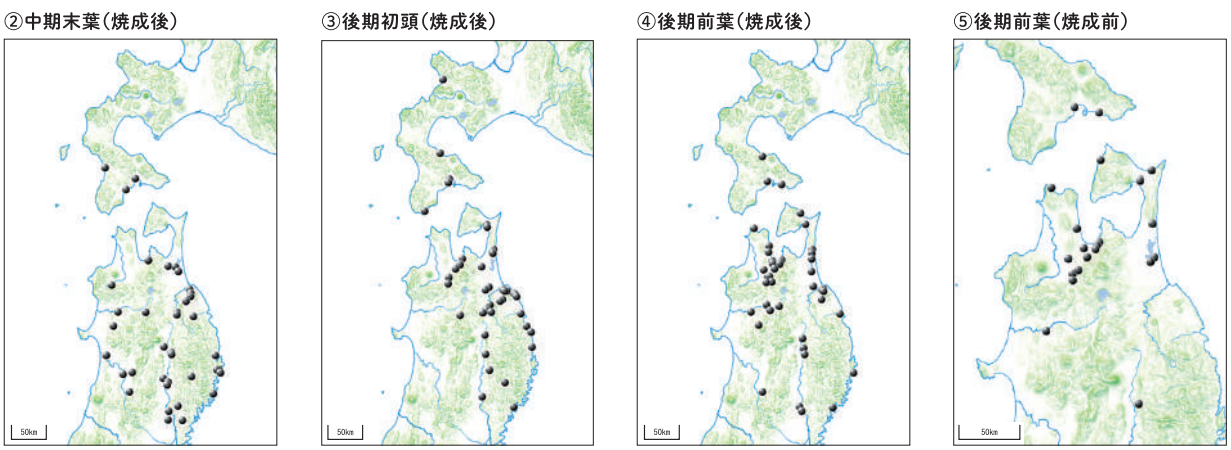


図19 彩色土器の分布　児玉2025より転載　①～④：焼成後彩色土器　⑤焼成前彩色土器
国土地理院地図

8 十腰内文化の特徴的な遺物② 信仰や祈りの姿を映す土製品・石製品

十腰内文化における土製品や石製品は、時期の進行に伴って形態が変化するなど、縄文人の信仰や暮らしの移り変わりを映し出しています。

縄文後期初頭には、縄文中期の伝統を受け継いだ無脚土偶が盛んに作られました（図20左）。顔を前方に突き出し、両腕を大きく広げた姿は、祈りや呪術的な所作を表しているのかもしれません。やがて後期前葉になると、有脚土偶が登場し（図20右）、立ち姿や動きを感じさせるポーズなど表現の幅が広がりました。これらは集落の人々が祭祀や儀礼の場で用いた信仰具であった可能性が高く、その造形は人々の祈りや願いを具現化したものといえるでしょう。

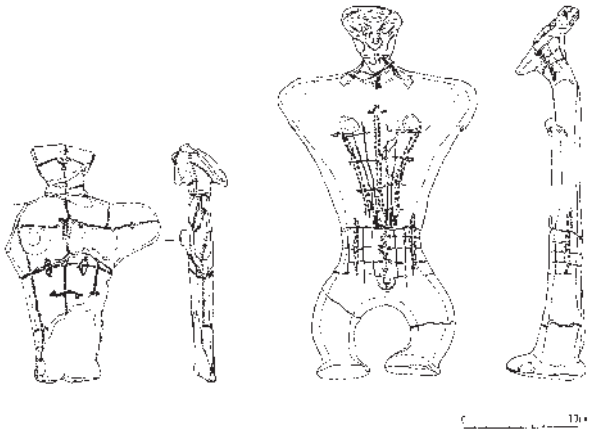
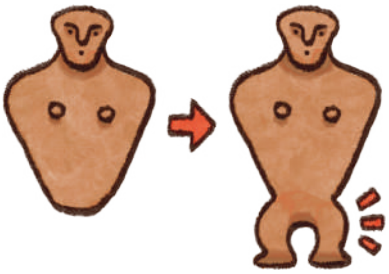


図20 後期初頭（左）と後期前葉の土偶（右）
左：野場（5）遺跡、右：有戸鳥井平（4）遺跡
青森県教育委員会1993、野辺地町教育委員会2001より転載





縄文 くらら
©野辺地町教育委員会

動物をかたどった遺物も豊富で、後期初頭には土器の表面に動物や弓矢などを粘土で表現した「狩猟文土器」が登場します（写真21）。後期前葉には単体のクマ形土製品のほか、土器の底部にクマ形を貼り付けた特殊な例もあり（写真22）、狩猟の重要性や動物への特別な思いが強く感じられます。





写真21 狩猟文土器（山野峠遺跡）
青森市教育委員会蔵



写真22 動物や狩猟の意匠のある遺物（小牧野遺跡）
青森市教育委員会蔵



こまっくー
小牧野遺跡PRキャラクター

さらに、祭祀や儀礼に深く関わったとみられる道具も数多く見つかっています。鐸形土製品、手形・足形付土版、そして三角形や円形の岩版などです。特に岩版類は、環状列石や大型配石遺構を伴う遺跡から出土する例が多く、祭祀・儀礼の中心的な場で重要な役割を担っていたと考えられます。その形や大きさ、文様には、当時の人々が共有していた象徴的な意味が込められていたことでしょう。



写真23 三角形岩版（小牧野遺跡）　青森市教育委員会蔵

9 まとめ

以上のように、縄文後期になると、青森県を中心に東北北部から北海道渡島半島にかけて、「十腰内文化」と呼ばれる共通の文化圏が形成されました。切断壺形土器や三角形岩版などの特徴的な道具、土器棺墓や石棺墓といった特異な埋葬、そして環状列石などの大型配石遺構が十腰内文化圏の各地で見られるようになります。

これらは共同体の結束や精神文化を象徴し、人々は祭祀や儀礼を通じて自然や祖先とのつながりを確かめ、集団としての意識を共有していたと考えられます。

そして現代に生きる私たちにとっても、人口減少や地域社会の希薄化が進む今こそ、縄文人が示した祈りのかたちや自然観に学び、それを未来への文化継承に活かしていきたいところです。

引用・参考文献

青森県教育委員会　1987『大石平遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
青森県教育委員会　1988『上尾駮(2)遺跡Ⅱ(B・C地区)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
青森県教育委員会　1993『野場(5)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
青森市教育委員会　1983『山野峠遺跡(石棺墓移転に伴う発掘調査)』
青森市教育委員会　2004『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書第72集
笠井 新也　1918「陸奥国発見の石器時代の墳墓に就いて」『考古学雑誌』第9巻第2号
葛西 勵　2002『再葬土器棺墓の研究』同書刊行会
倉石村教育委員会　1997『薬師前遺跡』
児玉 大成　2007「東北地方北部の再葬」『縄文時代の考古学9　死と弔い－葬制－』同成社、93-102頁
児玉 大成　2014「第2章 東北地方北部の信仰・祭祀施設の変遷　第1節 青森県」『信仰・祭祀』雄山閣、90-96頁
児玉 大成　2023「第4章 十腰内文化」『青森の考古学』青森県考古学会、45-55頁
児玉 大成　2025『彩色土器の考古学的研究』アクセス21出版
野辺地町教育委員会　2001『向田(24)遺跡・有戸鳥井平(4)遺跡・有戸鳥井平(5)遺跡』野辺地町文化財調査報告書第7集
平賀町教育委員会　1974『青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書』

図・写真の出典：各図・各写真に示していますが、記載のないものは青森市教育委員会または執筆者提供によるものです。
デザイン・イラスト：豊川茅（トヨカワイラスト研究室）
本冊子の執筆・編集は、青森市教育委員会事務局文化遺産課 児玉大成が担当しました。



縄文時代の謎を探る

環状列石と祈りのかたち

発行日：2025年11月7日
発行：青森市小牧野遺跡保存・活用推進事業実行委員会
〒030-0152 青森市大字野沢字沢部108番地3
TEL017-718-1392（青森市教育委員会事務局文化遺産課）